

秦伯泉というがある。そして秦姓は、今も永興、上村、尼ヶ瀬方面に多いから、川上というは、あるいは上村をもじつた地名ではなからうか。そこでまた想像であるが、伯龍は上村にいたが、その子孫がいつの頃から、永興に転住したものと解するのはどうだろうか。

七、尾語

以上記述するところを、大分市史の上よりいえば、安永天明期における府内文化の一断面を語るものであり、また梅園學よりすれば、その門流の一分布を示すものである。中にも多賀墨卿の如き、梅園門下としては従来あまり知られなかつた高足が、府内にあつたことは、最も注目すべきことである。けだし墨卿は、詩文の方面は兎も角、条理学においては、梅園の高弟中でも、第一人者ではないかとさえ思われるのである。少なくとも梅園門下としては、矢野雖愚、矢野蕉園、脇蘭室、弓崎俊平、青柳元龍らの如きと、肩を並べる一高弟といつてよいかと考えるのである。されば若し墨卿にして、梅園歿後にまで存命であつたならば、よく師の學を継いでこれを紹述し、条理学の講座は、向子山下より府内へ、南遷したかも知れなかつたと、夢想さえ浮ぶのである。故に何とかして墨卿の事歴ならびに業績に関する文獻を得たいものと、大分市稻荷町、牧、生石、および大分郡阿南村の小野屋に現住する多賀氏の全部を廻訪したが、遂に徒勞に終つたのであつた。(別大講師)

豊後の練貫酒

京都東福寺の有名な大極藏主の著碧山日録に、豊後の香配の話が見える。時は応仁乱の最中(一四六八)である。いわく「西客某来る、歎話の次でに曰く、豊之後州香酒を出す、練貫と名づく、その性濃醇にして、万里を数旬の間に歴と雖も、其の味

変らず、故に中州に至る者、多く之を載すと云」と。恐らく卯酒の一種で、渡明の者もこれを舶載したといふのである。閑吟集(室町時代の小謡集)に、
○南陽県の菊の酒のめば、命もいく葉、七百歳をたちても、齡はもとのごとく也、
く、

の如く、当時炭坑節の如く津々浦々で謡われたのも、豊後の練貫酒であろうか。国内は勿論、中国にまで輸出された練貫酒は、江戸時代には博多の名産となり、本場の方は衰えたらしい。(渡辺澄夫)